

再葬の背景

縄文・弥生時代における環境変動との対応関係

設楽博己

A Background to Reburial: Correspondence to Environmental Changes in the Jomon and Yayoi Periods

- ① はじめに
- ② 縄文中期末～後期前葉の再葬
- ③ 縄文晩期～弥生時代の再葬
- ④ 集落の消長と環境の変動
- ⑤ 再葬の背景
- ⑥ まとめ

【縄文晩期】

縄文中期末から後期へ、縄文晩期から弥生時代の始まりへ、それらはいずれも列島規模で、文化や社会が大きく転換した時代であり、時期であった。その歴史の節目に、地域や時代を超えて再葬墓が営まれることは何を意味するのだろうか。再葬が発達した地域におけるそれぞれの転換点で共通するのは、集落の衰退すなわち人口の減少である。環境変動に目を向けると、その転換期に共通した要素として気候の寒冷化をあげることができる。まさに、環境の悪化が再葬を誘発したといっても過言ではない。

歴史の中で再葬が出現する理由はさまざまであったろうが、死者を基軸に集落あるいは地域の結束を固めるための祖先祭祀として発生したことが、理由の一つにあげられる。自然環境の悪化によって小規模になり分散化した集落を統合する原点として再葬墓が機能したのであり、その象徴が再葬された祖先でありあるいは墓自体であった。

再葬が発達した縄文後期前葉の京葉地方は、気候の再温暖化によって大貝塚を形成したように、再葬がすべて悪い環境のときに発達したとばかりはいえない。自然環境の回復あるいは集落の発展を迎えても、ひとたび制度として定着した再葬は、なおも集落結集の装置として機能したのであろう。

琉球・奄美諸島の洗骨葬は、祖先祭祀の意味があり、縄文・弥生時代の再葬を考へる手がかりになる。そこで再葬は一種の通過儀礼として行われていた。縄文晩期～弥生時代前半は、抜歯をはじめとする儀礼を発達させた時期である。再葬制もこの時期に儀礼的要素を強めるのであり、祖先祭祀と通過儀礼の強化と言い換えることができる。それは厳しい自然環境に立ち向かうための生活技術であり、再葬の背景であった。

①はじめに

葬法の基本的な区分は、葬儀が一回で終わる単葬と、二回以上におよぶ再葬である〔大林一九六五・三三三～三五頁〕。再葬は、いったん遺体を骨にして再び葬る葬法であり、民俗・民族学では洗骨葬、複葬、二次葬などとも呼ばれるものである。筆者はかつて縄文時代の再葬例を集成し、その特徴に考察を加えた〔設楽一九九三a〕。縄文時代の再葬例は、一九九三年時点の集成で八〇遺跡におよんだが、その中でもとくに限られた時期に制度として発達したものは、以下の三群があげられる。

まず、縄文中期末葉から後期前葉に、青森県を中心に土器に遺骨を納めた再葬⁽²⁾が発達した。二番目に縄文中期末から後期前葉における千葉・茨城県の房総地方に、遺骨を数体から時には百体以上寄せ集めた多人数集骨葬が展開した。三番目にあげられるのは、縄文中期に長野県で出現し、晩期に発達するとともに近畿地方や北陸地方にまで拡散した、骨を焼いて再葬する焼人骨葬である。東日本の弥生時代前半には、大型の壺形土器に人骨を納めて埋納した再葬が発達したが、焼人骨はこの再葬墓にもしばしば伴っている。

縄文中期末から後期へ、縄文晩期から弥生時代の始まりへ、それらはいずれも列島規模で、文化や社会が大きく転換した時期や時代であった。その歴史の節目に再葬が発達することは何を意味するのだろうか。それを考える前に、それぞれの再葬に簡単に目を通しておきたい。

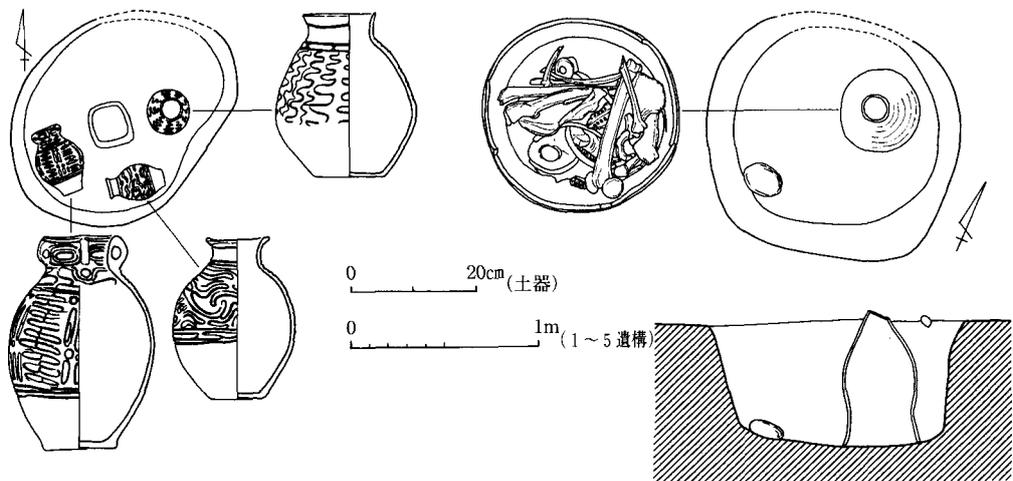
②縄文中期末～後期前葉の再葬

(1) 東北地方北部の再葬

東北地方北部では、縄文中期末葉から後期前葉に、土器に人骨を納め

た再葬が顕著に認められる。土器は再葬専用につくられた大型の壺を基本とする特殊なものである。この葬制を研究した葛西⁽¹⁾によれば、再葬土器は青森県を中心に、秋田、岩手、北海道渡島半島に及ぶ四九遺跡で発見されている〔葛西一九九八〕。その出現は縄文中期末葉の大木10式ごろとみなされており、後期前葉の十

腰内I式期前後に発達した(図1-1)。青森市山野峠遺跡のように再葬の土器に付随して、腕や脚の散乱骨が入った石棺墓が発掘される遺跡もあり、葛西はそれが一次葬の場所であると考えた〔葛西一九八三・二七四頁〕。この考えが正しいとすると、一次葬を石棺でおこなって骨化を待ち、土器を用いて骨を再葬する



1. 青森県鷹架遺跡13号

2. 埼玉県坂東山遺跡

図1 縄文後期の再葬墓

という、制度的に組織化された再葬の存在が想定できる。さらに、青森市小牧野遺跡のような大規模配石遺構に再葬の土器が伴うこともあり、そうした施設で再葬墓が何らかの役割を果たしていた可能性が考えられる。

土器の中から人骨が確認されたのは一四遺跡で、鑑定できたのは八遺跡。男性が五遺跡、女性が四遺跡。一八〜一九歳の女性が一例ある他は、成人〜熟年である。子どもの人骨が出土した例はないが、葛西は大木10式に突然現れ、十腰内I式とともに消滅する、蓋のついた小型の壺形土器が赤ん坊用の蔵骨器だったのではないかと考えている。六ヶ所村薬師前遺跡では一つの土坑から三つの土器が出土し、そのうちの二つにそれぞれ壮年の男女の人骨が納められていた。一つの土器に一体の人骨を納めるのを原則とするが、一つの土坑や石椁状遺構に二〜三個体の土器を納めた例があるので、一つの施設には合葬の機能をもつものがあつたといえよう。

薬師前遺跡の第1号土器の被葬者は壮年男性で、骨はほぼ全身に及び、椎骨を横たえその上に頭蓋骨を置き、上下肢の長骨を側方に斜めに立てかけており、蹲踞姿勢を復元したように配置されていた。第3号は壮年女性で、やはり蹲踞姿勢をとる。似たような例は数件報告されているので、偶然の結果ではない。蹲踞姿勢をとることについては、森本岩太郎が東南アジアの民族例をふまえて再生を願ったものと解釈している〔森本一九八八・七四頁〕。

(2) 関東地方中・北部

埼玉県入間市坂東山遺跡から、十腰内I式に発達した再葬に極めてよく似た事例があがっている〔並木ほか一九七三・一一八〜一一九頁〕。たらいのような形の土坑の底に頭蓋骨を置き、その上に肋骨や寛骨を積み、上下肢骨を立てかけ、底部を欠いた土器を逆さにかぶせたものである(図1-2)。土器は縄文後期初頭の称名寺I式であり、人骨は熟年

の男性であった。全身の骨を用いている点とその配置方法は、東北地方北部の例と合致している。さらに土器を倒立させて人骨にかぶせている点も薬師前例などと共通している。後期初頭という東北地方北部で土器を用いた再葬が発達しようとする時期からしても、坂東山例と東北地方の再葬との間に関係がないとするほうがむずかしい。

同様な土器を用いた再葬は、群馬県板倉町板倉遺跡でも報告されている〔外山ほか一九八九・三〇七・四一〇〜四二二頁〕。縄文中期後葉の加曾利EⅢ式である。人骨は頭蓋骨だけであるが、他の骨は消失してしまつた可能性がある。深鉢を逆位にして人骨にかぶせており、坂東山例との共通性がうかがえ、こうした例が中期後葉にまでさかのぼることを示している〔花輪一九九九・一二三頁〕。

(3) 房総地方

京葉地方には、一つの小さな穴に多数の遺体を合葬した多人数合葬が葬法として確立しており、さらに利根川沿いや外房地方にも分布をのびしている。複数の遺体を一箇所に葬つたものを合葬というが、これにも一次葬遺体の集積である単葬と、人骨の寄せ集めによって形成された再葬とがある。筆者は、明らかに人の手が加わつて集積された再葬人骨を集骨と呼んでいるので、再葬された多人数合葬を多人数集骨葬と呼ぶ〔設案一九九三a・一一頁〕³⁾。多人数集骨葬の多くは円形あるいは楕円形の土坑を掘り、その中に再葬人骨を集積したものであるが、頭蓋骨を土坑の壁に沿って配列したり、長管骨を束ねて積み上げたりしたものが多い。

房総地方の多人数集骨葬は、千葉県市川市権現原遺跡で一八体、船橋市古作遺跡で一四体、千葉市誉田高田遺跡で二八体以上、市原市祇園原遺跡で五体以上のものが二基認められた。茨城県取手市中妻遺跡では一つの土坑に一〇〇体以上の人骨が納められていた(図2-4)。最近では、千葉県茂原市下太田遺跡で三基の多人数集骨葬が見つかったが、そのうちの二基には四〇体近くの人骨が納められており、合計で八〇体以

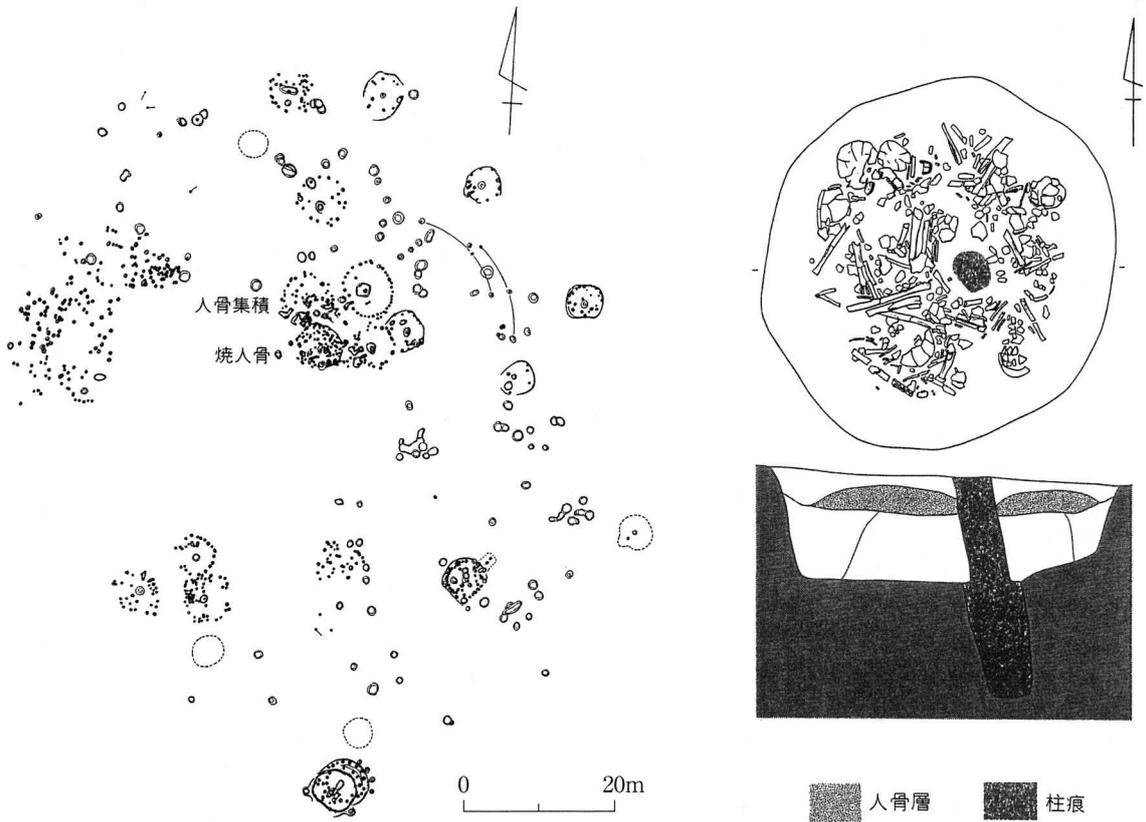
上と見積もられている。また、本来は単葬人骨の集合であるが、その中に再葬や二次的に動かされた骨を含んだ多人数合葬が二例知られている。船橋市宮本台遺跡では再葬された集骨や動かされた人骨を含んだ一三体の多人数合葬が、祇園原遺跡では、これも一部の骨に動かされた形跡のある六く七体の多人数合葬が見つかっている。

これら集骨葬を中心とする多人数合葬にはどのような特徴が認められるだろうか。この点はすでに渡辺新や山田康弘によってまとめられているが〔渡辺一九九一・山田一九九五〕、最近の事例を含めて再整理しておこう。出現の時期に関して、今のところ最も古い例は権現原例である。権現原遺跡は中期末葉の加曾利EⅣ式新段階から後期前葉の堀之内Ⅰ式終末ないしⅡ式初頭に及ぶ環状集落である〔渡辺二〇〇一・六五頁〕。

渡辺はこの遺跡の多人数集骨は、加曾利EⅣ式の二群に分かれた土坑の埋葬人骨を、後期初頭の称名寺Ⅰ式期に一つの土坑に再葬して成立したと考えている。その他のものは、古作遺跡が縄文後期中葉の加曾利BⅠ式期まで継続する可能性があるが〔設楽二〇〇一・五八く六〇頁〕、それ以外のものは大半が堀之内Ⅰ・Ⅱ式期である。誉田高田遺跡は堀之内Ⅰ式から始まる集落で、多人数集骨葬は集落開設後間もないころの集骨であり、中妻遺跡は称名寺Ⅱ式期に開設された集落だが、加曾利BⅠ式で隆盛を迎えるので、堀之内Ⅱ式とされる集骨は集落隆盛以前のものといえる。下太田遺跡は加曾利EⅡ式から加曾利BⅠ式までの墓地であり、多人数集骨葬は堀之内Ⅱ式と加曾利BⅠ式の面にあるが、中期の墓地がいくつかの環状構成になっているのに対し、堀之内Ⅱ式以降は方形区画になっている〔萩原ほか一九九九・五四一頁〕⁴⁾。称名寺く堀之内Ⅰ式期は乳幼児の土器棺しか見出されていないので、この時期の人骨をまとめて再葬した可能性がある。多人数集骨は、集落開設からほどない段階で集落が隆盛する前段階、あるいは墓地構成の大きな転換期に形成されていることがわかる。

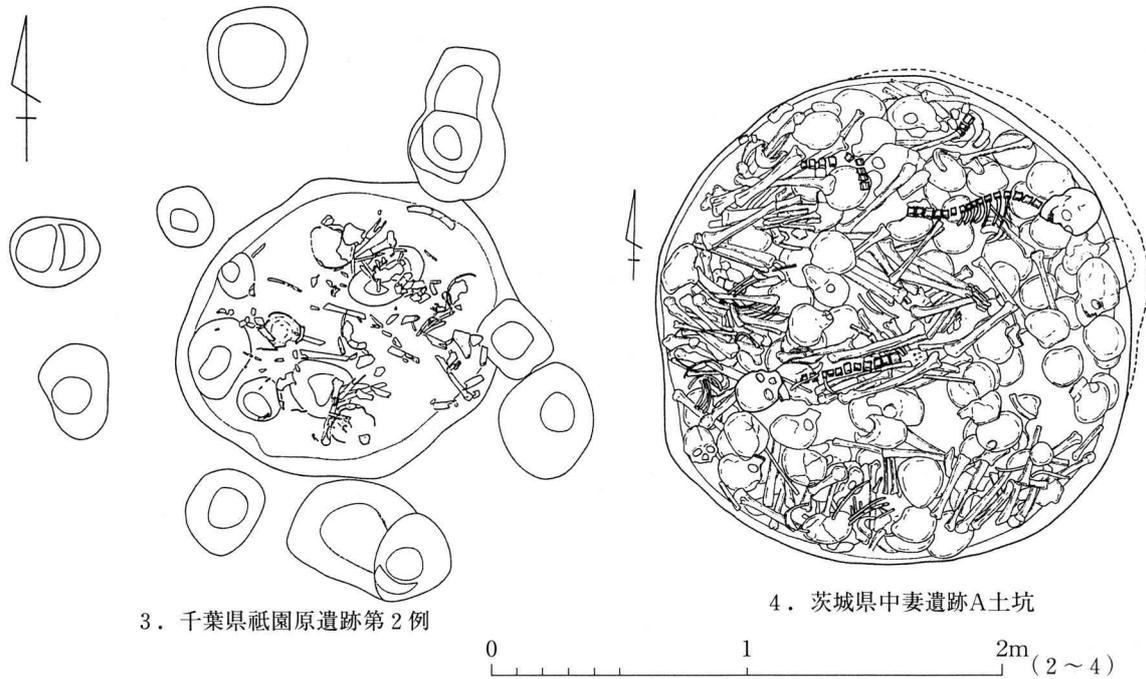
多人数集骨葬には、集落の中あるいは墓地の中で特別な位置に設けられるものがある。権現原例は環状集落のほぼ中央に位置し、二群からなる激しく重複した堀之内Ⅰ式の建物跡群それぞれに近接して、多人数集骨土坑と焼人骨一骨を納めた土坑が設けられている〔図2-1〕。この建物跡を渡辺は祭祀建物跡と性格付けている〔渡辺一九九一・三四く四一頁〕。祇園原例は二つの集骨葬が対になるような形で、環状集落の広場の部分に位置していた。このうちの一例は堅穴住居跡に接近した他の埋葬とは異なる位置を占め、もう一例は他の埋葬人骨が弧状に取り巻くような状況である。古作例も、他の埋葬人骨が取り囲んでおり、多人数集骨が埋葬の中心を占めている。中妻例は、集落の入り口付近に設けられている。下太田例は、伸展葬人骨が集合して構成されたいくつかの方形区画に挟まれた地点に存在している。

多人数合葬には上屋構造あるいは目印を想定させる施設をもつものが多い。権現原例は土坑の真中に深い柱の穴があり、それに対応する上部には人骨が円形に空白になっており、おそらく木柱が立てられていたのであろう。その周りに人骨が四角形の盤状をなすように配置されている〔図2-2〕。祇園原の二例はいずれも土坑の中に柱の穴があり、そのうちの一例は土坑の周囲を柱の穴が取り巻き、小屋がけされていたと思われる〔図2-3〕。誉田高田例も復元すると直径四メートルほどの円形をなす堅穴住居跡の掘り込みになる。宮本台遺跡の多人数合葬例を再検討した渡辺新は、一三体のうち確実に再葬されたものや骨の動かされたものが八体ほど含まれることを指摘した〔渡辺一九九四・一〇頁〕。そして、人骨の集積は一気になされたのではなく、三回ほどの断絶が認められ、時間差をもって集積されたという。土坑の周りには柱の穴のようないくつ列が認められる。祇園原で見つかった単葬の多人数合葬墓は壁柱穴をもつ方形の堅穴の中に伸展葬された人骨が井桁状に重なったもので、頭骨などに二次的な移動が認められる。米田耕之助は上屋の存在



1. 千葉県権現原遺跡全測図

2. 権現原遺跡人骨集積土坑



3. 千葉県祇園原遺跡第2例

4. 茨城県中妻遺跡A土坑

図2 縄文後期の多人数集骨墓

を考えており、遺体は埋められずに露出していて、追葬によって集積された可能性もあるとしており〔米田一九八〇…三五頁〕、その際に頭骨を中心に片寄せ行為をおこなったのであろう。

権現原、中妻、古作の多人数集骨は、おそらく別に埋葬された乳児を除くあらゆる性と年齢の構成から成り立っている。男女の比率は、権現原の性の分かる一六体の内訳は、男性九体、女性七体とほぼ釣り合いがとれており、夫婦を含む複数世帯の集合からなるとされる〔渡辺一九九一…六九～七二頁〕。これに対して中妻は男性対女性がおよそ二対一、古作は三対一と男性が圧倒的である。松村博文は中妻で分析に耐えうる二九例の歯冠を計測し、他の遺跡から出土した縄文時代の人骨もまじえてQモード相関係数によるクラスター分析をおこなったが、相関係数が高い五つのグループに分類し、そのうち血縁関係が強い二つのグループを抽出した〔松村ほか一九九六〕。歯冠計測による血縁関係の推定には、他人の空似が二〇パーセントほど出現したり、逆に血縁関係にあっても相関係数が低くなるというように信頼性に問題を含まれとされるが、歯冠計測をしたものと同一体二体を含む二九個体のミトコンドリアDNA解析の結果は、一七個体が同一のハプロタイプをもつことが確認され、分析資料は血縁関係の強いことが示された〔篠田ほか一九九八〕。この中には抜歯人骨が六体含まれるが、想定されるように抜歯人骨が婚入者だとすれば、中妻は血縁関係にあるものを中心にその配偶者も若干含んだ構成といえる。古作例は、男性を中心とした多人数集骨を多くの女性と少数の男性が取り巻いており、墓地全体が世帯の集合体をなしているようにみえる〔設案二〇〇一…五八～六一頁〕。

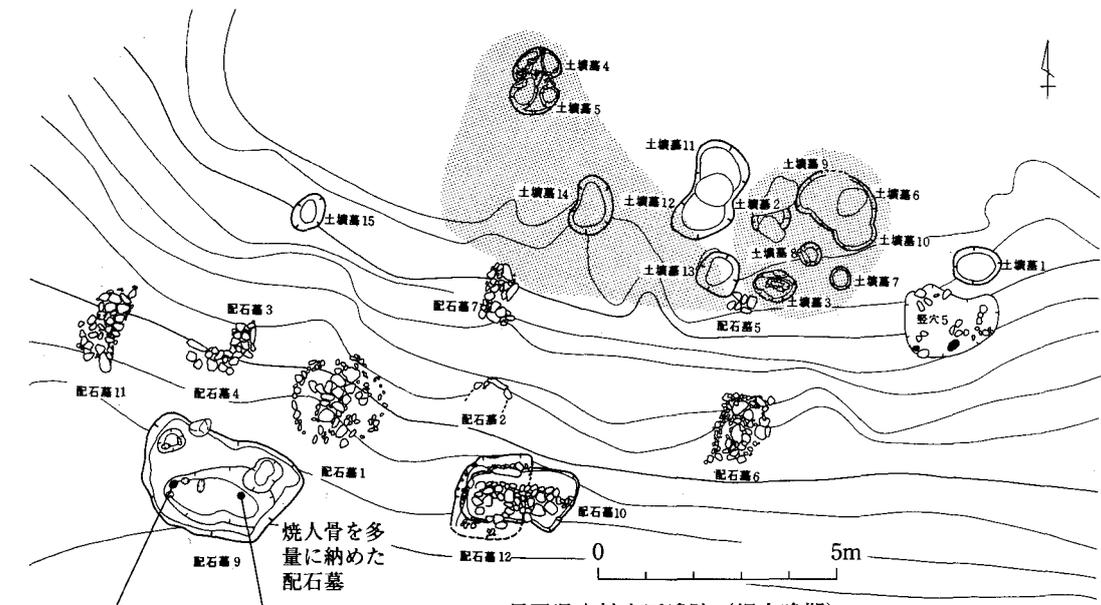
③ 縄文晩期～弥生時代の再葬

(1) 縄文晩期の焼人骨葬

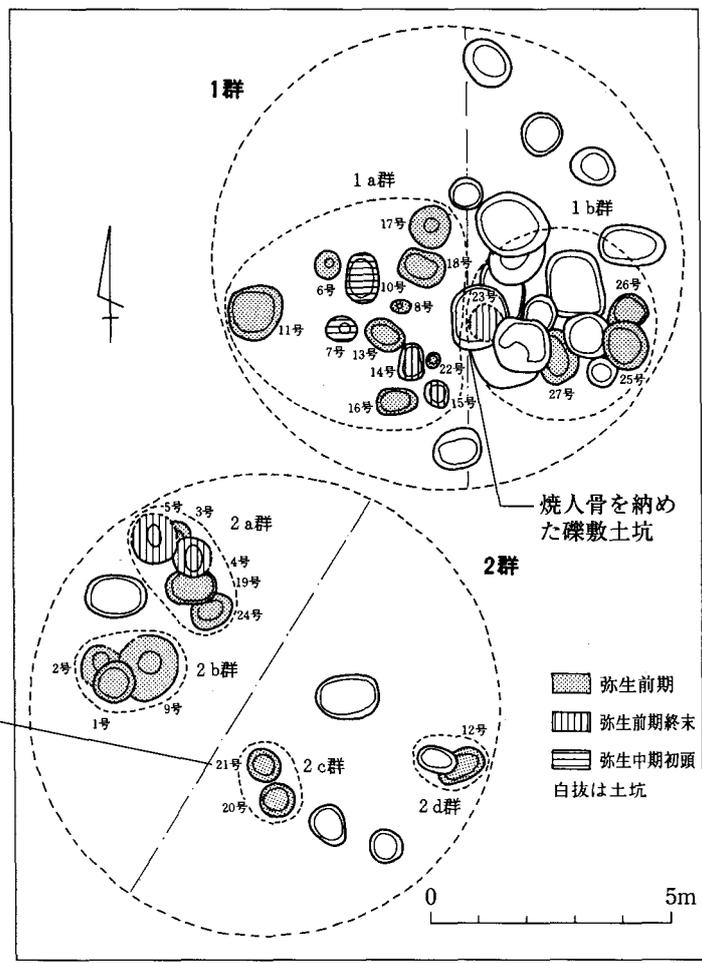
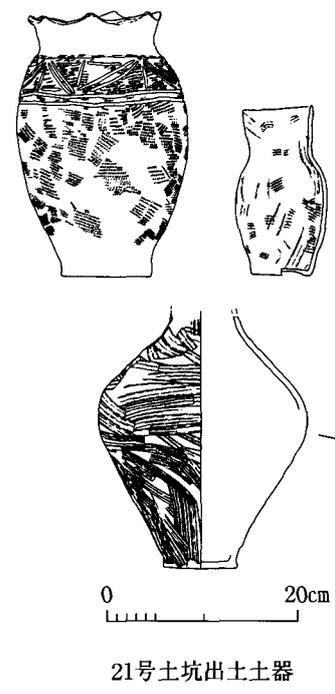
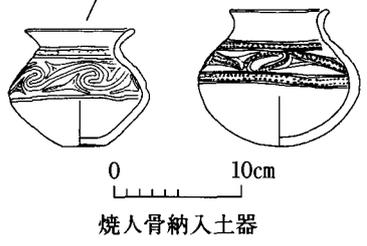
人の骨を焼いて埋葬する葬法を、焼人骨葬と呼んでいる〔設案一九九三a…二八頁〕。最も古い焼人骨葬としては、岡山県瀬崎町彦崎貝塚に縄文前期の例が認められ、それ以降中期、後期を通じて散発的に見られるが、葬法として定着するのは縄文晩期の長野県を中心とした地域である。長野県伊那市野口遺跡、飯田市中村中平遺跡、大桑村大明神遺跡、山梨県長坂町上条遺跡、新潟県青海町寺地遺跡、奈良県中荘村宮滝遺跡、榎原市榎原遺跡などが縄文晩期前～中葉であり、長野県日義村芝垣外遺跡、茅野市御社宮司遺跡、山梨県大泉村金生遺跡などが晩期終末である。これら諸例のうち、芝垣外と御社宮司、榎原例以外は、いずれも配石遺構あるいは組石遺構に伴った〔設案一九九三a…二八頁〕。

野口遺跡は長さ二メートルにも及ぶ長方形の石組みの中に七群の配石があり、各配石に合計で少なくとも三二体の細片化した焼人骨が入られていた。中村中平遺跡では不整形の9号配石墓に細片化した焼人骨がおよそ三〇キログラム含まれていた。そこからは焼人骨が数一〇グラム入った小型壺二個体も出土している〔馬場一九九四…四七頁〕。大明神遺跡では円形配石の集合体に一二体以上の故意に碎かれて細片化した焼人骨が層をなしており、焼けた獣骨も伴った。寺地遺跡は円形の炉状配石をもつ土坑中に一二体以上の細片化した焼人骨が焼けた獣骨とともに納められている。中村中平遺跡ではほかにも焼人骨を出土する土坑がみとめられているが、それらのなかにおいて9号配石墓は多量の焼人骨や蔵骨土器を納めたひときわ目立つ存在である。付随するいくつかの配石墓には人骨が伴わないので、そこが一次葬の場であり、ほぼそれに見合った数の土坑に再葬人骨を埋納し、残りの焼人骨を9号配石墓に埋納した可能性がある〔図3-1〕。野口遺跡は石組み遺構だけが調査されており、周辺の状況は分からないが、中村中平9号墓と同じく墓地の中心をなす施設だろう。

このように、焼人骨葬は多人数の遺骨をまとめて埋葬している点に特



1. 長野県中村中平遺跡（縄文晩期）



2. 群馬県沖Ⅱ遺跡（弥生前期）

図3 縄文時代と弥生時代の焼人骨土坑を伴う再葬墓

色があり〔永峯一九八四・二二頁・石川一九八八・一〇〇頁〕、墓地の中心をなす施設として存在しているものが注意を引く。故意に碎かれたものや同じ扱いを受けたシカやイノシシなどの焼獣骨を伴うことがあることも特徴といえよう。全身の骨が確認される場合が多いが、細片化した焼骨という性格上男女の性別はわからないことが多い。年齢も正確にはわからないが、野口遺跡は熟年、壮年を中心に若年を含み、大明神遺跡2号配石は成人以上の高齢者、寺地遺跡は未成人一個体を含むがおおむね成人であるとされており、成人以上に偏っていることが分かる。しかし、分析資料の性格から明確とはいえない。焼人骨には2C型の抜歯がみられることが多いが、大明神遺跡では4I2C型の抜歯人骨が含まれていた。抜歯型式が出自を示すものであるという春成秀爾の説に従えば、集落出身のものも婚入者とともに再葬されたということになるが、これも乏しい資料であり確証はない。

(2) 縄文晩期終末～弥生時代の再葬

弥生時代には再葬が各地で見出されているが、もっとも発達したのは弥生時代前半すなわち前期～中期中葉の東日本である。蔵骨器に大型の壺を多く用いており、一つの土坑に複数の土器を埋納することに特色がある。こうした特色をもつ再葬墓をここでは仮に弥生再葬墓と呼んでおきたい⁽⁶⁾。これまでに一〇〇をこえる弥生再葬墓が発見されているが、それらにみあう集落跡は極めて限られている。

かつて東日本の弥生時代が中期からはじまると考えられていた頃には、最も古い弥生時代の遺跡が再葬墓遺跡であることや、各地の再葬墓遺跡で愛知県方面の壺形土器が蔵骨器に用いられていることに注目して、西方からの農耕の伝播とともに成立した葬墓制であると理解されていた〔星田一九七六・三七頁〕。しかし、最古の弥生再葬墓は霊山町根古屋遺跡など福島県下の縄文晩期終末にさかのぼり、用いられている蔵骨器はその地方の縄文時代終末の大洞A式土器を主体としたものであることが

判明し〔大竹編一九八六〕、在地的な縄文時代の伝統を踏まえてその起源を考え直す必要が生じた。

根古屋遺跡の土器と人骨にみる抜歯型式は、在地的な伝統と中部地方からの影響が強うかがえる〔設楽一九九一〕。出土した人骨は推定一〇〇～二〇〇体にのぼるがすべて焼けており、長野県を中心に縄文晩期に発達し、晩期終末まで継続する集団的な焼人骨葬の流れを汲んでいる。人骨の中にイノシシやシカなどの焼けた獣骨が混じっているのも、それ以前からの流れの中で理解できよう。弧状の墓地はそれが埋葬小群と呼ばれるいくつかの墓坑群によって構成されており、その構造の分析から筆者は縄文時代の環状墓域と同じ原理をもつことを明らかにした〔設楽一九九三b・三四～三六頁〕。手足の指の骨や臼歯に穿孔した垂飾が、焼人骨に混じって二三点見つかった。近年、岩手県大船渡市大洞貝塚で縄文晩期前半の例が見つかり、この習俗が東北地方中部の縄文時代にさかのぼることが判明した。

弥生再葬墓の蔵骨器はまれに全身の骨を納めているが、四肢骨など部分的な骨が認められる例や骨粉のみの場合が多く、部分的な骨しか納めなかったのが通例らしく、残りは焼いて遺棄されたりした。長野市宮崎遺跡では縄文晩期終末の土器の下に成人の下顎骨が再葬されていた。部分骨再葬の原形は、このあたりに求められよう。群馬県月夜野町八束屋岩陰遺跡では最少三四個体に及ぶように、岩陰から多量の焼人骨が見つかる場合がある。遺体ないし遺骨処理の場であろう。群馬県藤岡市沖II遺跡では弥生再葬墓のほかに焼人骨を多数入れた石敷きの土坑が見出されており〔図3-2〕、中村中平遺跡の9号配石墓との類似が注意を引く。

これらの遺構群から、縄文晩期終末以降の再葬には、①土葬あるいは風葬によって一次葬をおこない、②遺骨の一部を土器に納めて埋葬し、③残りの骨を岩陰などで焼き、④それらをそのまま岩陰に残したり、土

坑に埋納した、という葬儀の過程が復元できる。細部の違いはあるが、こうした葬儀の原形は縄文晩期前葉の中村中平遺跡にみることができるといえる。

最古の弥生再葬墓は、このように縄文時代以来の墓制の様相を強く維持している一方で、縄文時代からの伝統だけでは片付けることができない現象も多数指摘できる。弥生前期には早くも長野県方面から環状墓域が集塊状に変質するようになり、やがてそれは栃木県にも及んだ〔設案一九九三b・三三〇三八頁〕。また、愛知県方面からは条痕文土器が流れ込み、それに伴ってある種の土器の埋設方法も伝わった〔設案一九九四・四一五〇四一六頁〕。大型の壺を棺や蔵骨器に用いるのは弥生時代に普及する。初期の弥生再葬墓の大型壺には在来の甕を改造させて大型壺に仕上げたものもあり、そうした現象も弥生時代への移行期ないし弥生時代になって日本列島内に広域に認められる。弥生再葬墓は、まさに時代転換期の複雑な事情が反映した墓制だといえよう。

弥生再葬墓の特徴は、複数の土器が一つの土坑に納められることであり、なかには一〇個体以上に及ぶものもある。土器がすべて蔵骨器であったかは問題で、副葬品や玉類を納めた容器として副葬されたものもあった〔設案一九九三b・二六〇二七頁〕。しかし、一つの土坑に埋葬された複数の土器から複数人の遺骨が見つかった例も、一つの土器の中に複数人の遺骨が納められた例もないことはない。再葬にはある種の合葬の意味があったことは確かであろう。

蔵骨器や岩陰あるいは包含層に残された骨は男女ともに見られるが、蔵骨器のそれには少年以下の若年例のものが少ないのに対して、根古屋の包含層や八束脛岩陰の焼人骨は胎児から老年まで各年齢層のものが認められる〔設案一九九三b・一七〇一八頁〕。蔵骨器の人骨事例が少ないことや、性、年齢の細かい同定が困難な現状では明言しかねるが、縄文晩期の焼人骨のあり方を踏まえると、骨を焼く習俗は縄文時代に成人以上のものを中心におこなっていたものが、その終末から弥生時代には

あらゆる年齢層に拡大した一方、土器に納めるのはほぼ成人以上に限定されるようになった、という仮説を提示しておく。

ここまで、制度的に発達した再葬の特徴を事例に即して述べてきた。これらほどのような社会的な変化が訪れた時期なのであるか。集落の消長と環境の変動という点から分析してみることにはしたい。

④ 集落の消長と環境の変動

(1) 東北地方北部における縄文中期末葉の集落動態

青森市三内丸山遺跡は縄文前・中期に発達した巨大集落として知られているが、この集落は中期末葉に衰退した。東北地方北部における中期末葉から後期初頭では、大規模集落は減少し、小型化、分散化の傾向を示すとともに、尾根筋や谷などへ進出する立地の変化をみてとることができるという〔岡田一九九八・三五頁〕。縄文前・中期を通じて形成された円筒土器というこの地域固有の土器型式が途絶え、後期には異なる土器文化が形成されるようになる。ある意味では、東北地方北部の縄文中期から後期への移行期は、文化的再編成の時期であったといえよう。その後、十腰内I式期になると集落は活況を呈するようになる。これは集落数が増加した関東地方の堀之内1式期に並行し、中期末葉から後期前葉にかけての集落の衰退と再生は、地域を超えてよく一致した動向といえることができる。

中期の大規模な拠点集落が途絶える一方で、後期になると小牧野遺跡や秋田県鹿角市大湯遺跡のような方形あるいは円形の列石が出現してくる。これらの列石は、径あるいは辺が四〇〜五〇メートルと巨大である。これらの中の二箇所から再葬の小牧野遺跡の列石の性格は明確ではないが、その中の二箇所から再葬の土器が検出されていることからすると、葬儀祭制にかかわる大規模配石記念物〔小杉一九九五・一四一頁〕とみなすことは許されよう。その規

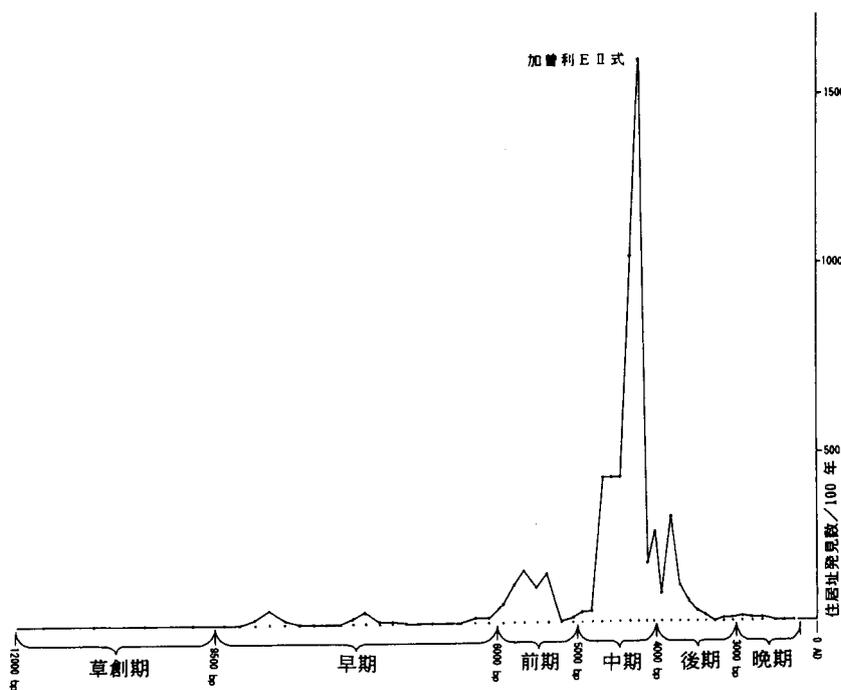


図4 西南関東における土器型式ごとの発掘された竪穴住居跡数（100年あたりの軒数に換算）

模や配石の状態からすると、とても一つの集落によって構築されたものとは考えがたく、地域集団の協業によるものであろうことは、多くの研究者が認めるところである。

小林克は秋田県内の縄文晩期の墓制を分析し、東由利町湯出野遺跡などでは頭位方向が東西の群と南北の群の二つに分かれていることに目をつけ、系譜を異にする二つの居住集団の存在を想定した。つまり縄文中期後葉に集中して居住していた集団が、後期以来分散居住するようにな

り、それが晩期にも引き継がれた結果であり、分散居住している居住集団が共同の墓地を形成する場合には、各集団の社会的な関係が頭位方向に反映されたのだ、と解釈した（小林一九九五）。そして、分散居住の要因を気候の寒冷化などに求めている（小林一九九七・二八二～二八三頁）。

三内丸山遺跡など、縄文前・中期に頂点を迎えた東北地方北部の集落は中期終末になると解体し、後期には小規模集落へ変貌していく。それに引き換え、墓地はあいからわず大きなものがあることや、さらに小牧野や大湯のような巨大な葬祭記念物が構築されるようになる点、また山野峠の石棺墓が中期の列状墓の伝統を引いていることからすると、巨大集落が解体してからも、なおも人びとを結びつける絆は、墓地あるいは葬祭記念物の建造および利用のなかに維持されていた（岡田一九九八・三五頁）。さらに、小牧野遺跡には再葬墓が伴い、大湯遺跡も再葬墓の可能性があると指摘（林一九九一・一〇六～一〇七頁）を肯定すれば、大規模葬祭と再葬の密接な関係もうかがえる。分散居住をした後も小集団の結集の原点が墓であったという小林説は肯定できるし、再葬という死者儀礼がそれを媒介していた可能性もありうるだろう。

(2) 南関東地方における縄文中期以降の竪穴住居数の変動

南関東地方では、縄文前期末葉に激減した遺跡数は中期に入ってから上昇し、中期中葉の勝坂、加曾利EⅠ・EⅡ式に頂点を迎えるが、後葉の加曾利EⅢ式から終末の加曾利EⅣ式に集落の規模は縮小したり数が減ったりするといわれている。後期初頭の称名寺式期に遺跡数減少のピークがあり、前葉の堀之内Ⅰ式には東京湾岸で再び大遺跡群を展開するようになるともいわれる（今村一九七七・一三三頁）。後期後葉から晩期に遺跡数が減少するのは定説化している。こうした遺跡数の変動がただちに人口の増減と結びつくものでなく、今村啓爾は竪穴住居跡の数の変動を人口の増減を類推する手がかりとした。西南関東地方で発見された竪穴住居跡の数の変動グラフ（図4）（今村一九九七・四九頁）は、

上述の遺跡数の変動とよく一致している。多人数集骨葬が展開する千葉県下で、こうした変動を具体的な数字として示した例は寡聞にして知らないで、資料にもとづいて集計した。

表2・図5は多人数集骨葬が発達する京葉地方東京湾東岸の船橋・市川・松戸・鎌ヶ谷・千葉・市原市の縄文時代竪穴住居跡数の移り変わりを示した表およびグラフである。縄文前期では前葉の関山式にピークがあり、その後減少に転じ、末葉には0棟と壊滅状態になる。中期初頭はまだ低い水準だが、中葉の阿玉台・勝坂式期から急上昇し、加曾利EⅡ式期で頂点に達した。加曾利EⅢ式は高水準を保っているが、EⅣ式に激減して後期初頭の称名寺式期にその前後で最低になる。堀之内1式で再び急増して全期間を通じて最も竪穴住居棟数の多い時期になるが2式で急減し、それ以降晩期終末にいたるまで低水準を保つ。西南関東地方との間には加曾利EⅢ式および堀之内1式の比率に著しい違いがあり地域的な特性を反映しているものの、変動の傾向はおおむね西南関東地方と共通した傾向を示すことができる。すなわち、加曾利EⅡ式にピークを迎え、称名寺式期に減少し、堀之内1式に再び増加するというこれまでいわれてきた動態が京葉地方東京湾東岸でも実態として裏付けられたことになる⁸⁾。

しかし、細別された土器型式の継続年数は一定とは限らないので、ここに示した数字も短期間における棟数なのか長期間の累積の結果なのかわからない。そこでAMS法による炭素14年代測定とその較正の結果にもとづく細別土器型式継続年の概数(表3-②)から割り出した土器型式継続年数の比率(表3-③)にもとづいて、各土器型式ごとの竪穴住居跡数の比率を求めた(表3-④)。その結果が表3・図6である。加曾利EⅡ式が最高水準であることは変わらないが、EⅢ式に顕著な減少が指摘できる一方、EⅣ式の落ち込みがうっすらと見られる。称名寺式期がこの前後でもっとも低水準であることも変わらないが、堀之内1式

の増加が控えめになっている。

こうした変更が正しいとすれば、見かけの竪穴住居数でその消長を議論することは危険なことを示している。AMS法による年代測定や、それを利用して土器型式の時間幅をどのように見積るかという問題については今後の研究の深化を待つほかないが、図5と6に共通する傾向として、加曾利EⅡ式に増加のピークがあり、称名寺式でもっとも低水準になり、堀之内1式で再び増加することが読み取れる。

以上の結果にもとづいて、称名寺式期と堀之内1式期の傾向について多少触れておきたい。称名寺式期の集落は規模が小さいものが多いことが指摘されており、その傾向は下総台地にも当てはまることからすると、称名寺式期には集落の分散が強まって規模が小さくなり、人口も激減したという予測(今村一九七七・一三三頁)は妥当なものである。また、称名寺式土器が加曾利EⅣ式を母体としながらも、西方の中津I式系統の侵入という特異な状況下で形成されてきたこと(今村一九七七・一三一頁)や、柄鏡形の住居形態や石棒が加曾利EⅣ式(称名寺I式)に西関東という外部から導入されたこと(渡辺一九九五・五七五～五八頁)も、中後葉に顕著になる人口激減とそれに伴う文化衰退を背景とした結果と理解することができる。

堀之内1式の竪穴住居数の増加は見かけより割り引いて考えなくてはならないが、称名寺式期の分散的小規模集落の傾向から比べると、集落規模の拡大はやはり顕著な現象として指摘せざるを得ない。継続期間に比べて土器型式の変化がうっすらと見られることは、それだけ安定した社会生活が営まれた可能性も考えさせる。この時期の竪穴住居数の見かけの多さは、土器型式継続年数の長さと同時に竪穴住居数の増加からうかがえる人口の増加という二つの側面から説明しなくてはならないのであろう。それでは、こうした竪穴住居数の変動の要因としてはどのようなことが考えられるのだろうか。食料ということに限ってみても、一般論とし

表1 京葉地方東京湾東岸（船橋・市川・松戸・鎌ヶ谷・千葉・市原市）の縄文時代遺跡数

時期	草創期	早期						前期						中期						後期						晩期															
土器型式		井草	夏島	稲荷台	花輪台	三戸	田戸下・上層	子母口	野島	鷗ヶ島台	茅山下・上層	茅山下・上層	花積下層	関山	黒浜	諸磯a	諸磯b・浮島	諸磯c・興津	十三善提	五領ヶ台・下小野	勝坂・阿玉台	中峠	加曾利E I	加曾利E II	加曾利E III	加曾利E IV	称名寺I・II	堀之内1	堀之内2	加曾利B1	加曾利B2	加曾利B3	曾谷	安行1	安行2	安行3a	安行3b	安行3c・前浦I	安行3d・前浦II	千網	荒海
遺跡数	0	20	27	33	6	12	34	10	12	20	227	25	71	160	56	163	60	13	47	245	13	138	309	184	85	113	254	100	168	114	72	15	77	50	23	14	8	1	3	7	

表2 京葉地方東京湾東岸（船橋・市川・松戸・鎌ヶ谷・千葉・市原市）の縄文時代竪穴住居跡数

時期	草創期	早期						前期						中期						後期						晩期															
土器型式		井草	夏島	稲荷台	花輪台	三戸	田戸下・上層	子母口	野島	鷗ヶ島台	茅山下・上層	茅山下・上層	花積下層	関山	黒浜	諸磯a	諸磯b・浮島	諸磯c・興津	十三善提	五領ヶ台・下小野	勝坂・阿玉台	中峠	加曾利E I	加曾利E II	加曾利E III	加曾利E IV	称名寺I・II	堀之内1	堀之内2	加曾利B1	加曾利B2	加曾利B3	曾谷	安行1	安行2	安行3a	安行3b	安行3c・前浦I	安行3d・前浦II	千網	荒海
竪穴住居跡数	0	5	2	8	1	12.5	6	30	0	15.5	33	35	284	133.5	27.5	53	11	0	7	265	80.5	382	514	469	222	162	518.5	63.5	34	54	31	23.5	28	19	43.5	8.5	1	4	0		

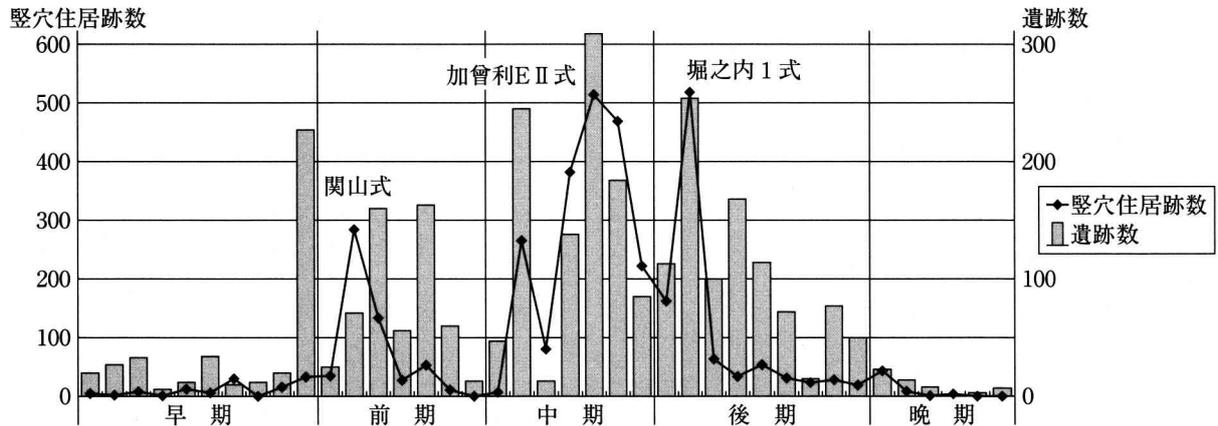


図5 京葉地方東京湾東岸（船橋・市川・松戸・鎌ヶ谷・千葉・市原市）の縄文時代遺跡数と竪穴住居跡数の変動

表3 京葉地方東京湾東岸（船橋・市川・松戸・鎌ヶ谷・千葉・市原市）の縄文中期以降土器型式別竪穴住居跡数比率

時期	中期							後期							晩期			
土器型式	五領ヶ台	阿勝坂・中峠	加曾利E I	加曾利E II	加曾利E III	加曾利E IV	称名寺I	堀之内1	堀之内2	加曾利B1	加曾利B2	加曾利B3	曾谷・安行	安行2	安行3a	安行3b	安行3c I	安行3d II
① 竪穴住居跡数	7	345.5	382	514	469	222	162	518.5	63.5	34	54	31	51.5	19	43.5	8.5	1	4
② 暦年較正年代幅(年)	90	480	90	100	190	100	180	290	260	50	140	100	150	130	140	80	100	100
③ 暦年較正年代幅比率	3.25	17.33	3.25	3.61	6.86	3.61	6.5	10.47	9.39	1.81	5.05	3.61	5.42	4.69	5.05	2.89	3.61	3.61
④ 竪穴住居跡数比率(①÷③)	2.15	19.94	117.53	142.38	68.37	61.5	24.92	49.52	6.76	18.78	10.69	8.59	9.5	4.05	8.61	2.94	0.28	1.11

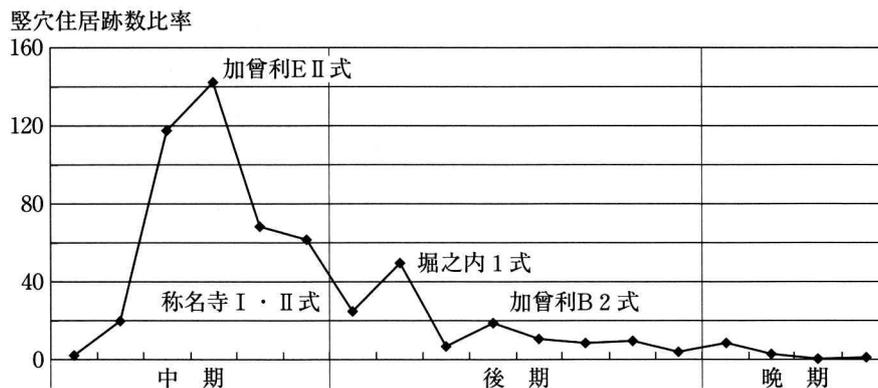


図6 京葉地方東京湾東岸（船橋・市川・松戸・鎌ヶ谷・千葉・市原市）の縄文中期以降竪穴住居跡数比率の変動

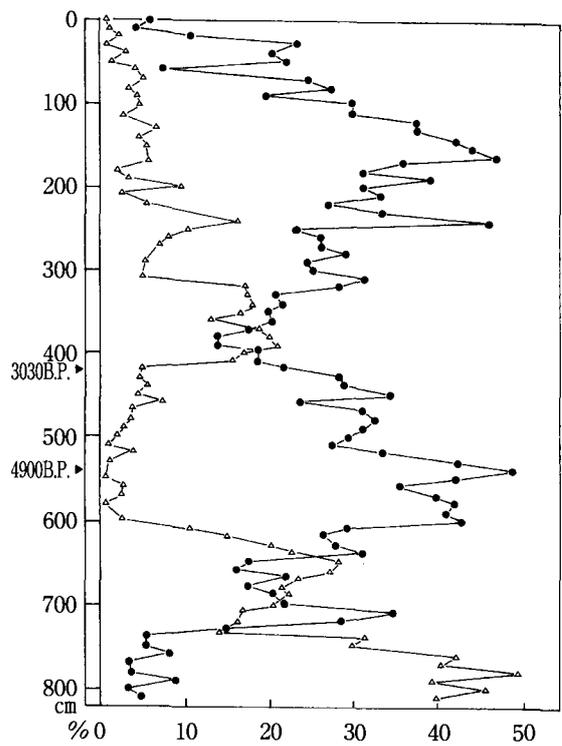


図7 長野県八島ヶ原湿原の花粉分析ダイアグラム
(△トウヒPicea ●ミズナラQuercus)

たとえば製塩やそれを含む食料交換、あるいは狩猟漁撈の道具の改良など、人間が生み出す文化がもたらした経済的效果という内的要因によって人口が増大し、遺跡の数が増える場合がまずあげられる。一方、採集狩猟を基本的な生業としている縄文時代においては、集落を取り巻く自然環境の変動に食料の寡多などが左右されることもまた当然である。本稿では、このうちの環境変動という外的要因に焦点を当てて、関東地方における集落の消長の背景を探ってみたい。

(3) 環境変動と遺跡の消長 後水期における海面上昇は、およそ六〇〇年前の縄文前期をピークとし、それ以降海退に転じ、温暖であった気候も冷涼化に向かった。埼玉県川口市赤山陣屋遺跡などでは、縄文中期初頭に明瞭な浅谷形成のあったことが確かめられているが、これは急激な海面低下、気候の寒冷化を意味するという(辻一九八九…一六六頁)。これを契機に暖温帯から冷温帯にかけての植物群にトウヒ属やヤチダモ

といった高所あるいは北方の要素が加わったように、気候の寒冷化は植物遺体や花粉からも証拠付けられている。長野県八島ヶ原湿原における泥炭層の花粉分析の結果、四九〇〇年ほど前をピークとしてミズナラが減少をはじめることが確認されたが(金井ほか一九六八…一九頁)、おそらくそれが南関東地方などで遺跡が激減する縄文前期終末〜中期初頭の寒冷化の時期に相当するのだろう。およそ二八〇〇年前以降二〇〇〇年程前まではトウヒが多くなり、縄文海進以降もとても寒冷な時期になる(図7)。

太田陽子らは、縄文海進以降に二つの小さな海面低下期あるいは海面停滞期を認めた(太田ほか一九八二…一三九頁)。それは①五〇〇〜四〇〇年前と②三〇〇〜二〇〇年前であり、①は「縄文中期の小海退」と呼ばれた。上述の赤山陣屋遺跡などでその後確認されたのは①の海退の痕跡であるが、これらは同一地点で②の谷によって削られてしまふなどして、それまで確認が困難だったという。それでは②の谷の性格はどのようなものだろうか。

井関弘太郎は、現在の海水準面下に弥生時代の海岸侵食によって形成された浅い谷が埋もれていること、すなわち埋積浅谷の存在を愛知県豊橋市瓜郷遺跡周辺地形のボーリング調査によってつきとめた(井関一九五〇)。当時の水面が現海面よりも低かったことは、瓜郷遺跡の弥生中期の竪穴住居跡床面が現海面とほぼ同じレベルにあり、満潮時には浸水してしまうことや、二〇〇B.P.頃の年代が測定されている富山湾の埋没林の存在、ほぼ同じ年代を示す北陸地方の旧期クロスナ層と呼ばれる腐食土層が海面下に広がることなどからも裏付けられている(井関一九八五…一八〇頁)。その低下は、現海面よりも二〜三メートル低かったものとされ、弥生中〜後期頃から埋積が進んだと考えられている(井関一九八五…一八四〜一八五頁)。

古川博恭はこれを「弥生の小海退」と呼んだが(古川一九七二)、そ

の海面低下現象は縄文後・晩期から弥生時代にかけて生じたと考えられているので〔井関一九八五・一八〇頁〕、この時期の海退の一面をとらえた言葉といえよう。問題は、この小海退の始まる時期である。赤山陣屋遺跡では、後期以降堆積した木本質泥炭の上に広範囲のゆるやかな切れ込みがあり、この面を境に草本質の泥炭にがらりと変わる。その境に堆積したテフラの年代は三〇〇〇BPを示す。辻誠一郎は、上位の谷の形成を晩期終末から弥生時代初頭としているが〔辻一九八九・一六一頁〕、これは晩期末でなく後期終末ないし晩期初頭ではないか。石狩地方と尾瀬の泥炭層における花粉を分析した阪口豊は、三〇〇〇年前頃を境にして気候が急変したとしており〔坂口一九六一・二六四～二六五頁〕、遠藤邦雄・小杉正人は関東平野の潮間帯にすむ貝類と植物遺体の炭素14年代測定から相対的海水準の変動を割り出した結果、五〇〇〇～四〇〇〇年前と、三〇〇〇～二〇〇〇年前とに海水準の小規模な低下があったと推定している〔遠藤ほか一九八九・一四二頁〕。いわゆる弥生小海退の開始は、三〇〇〇BPすなわち縄文後期終末～晩期初頭に求めるのが妥当だろう。

もう一つの問題は、縄文中期の小海退と、いわゆる弥生の小海退の間に、海水準が上昇する時期、すなわち小海進があったかどうか、という点である。遠藤らは直接的データを欠くものの上昇した根拠は見当たらず、むしろ海水準は段階的に低下していったほうが沖積層の発達過程を説明しやすいとする〔遠藤ほか一九八九・一四二頁〕。一方、堀之内式期に急激な海進があったことを指摘した酒詰仲男〔酒詰一九六一・三二〇～三二二頁〕や、千葉県九十九里地方で後期に海進があったとする中野尊正の指摘〔中野一九五二・六二頁〕などを踏まえて、小野田正樹は縄文海進以降の海退は、海岸線が後退する一方であったという従来の見解に疑問を投げた〔小野田一九八二・一五四～一五五頁〕。前田保夫らは愛知県下別所遺跡や林ノ峰遺跡など後期の貝塚が、中期の乙

福谷遺跡よりも高所にあることなどから、縄文後期に小規模な海面上昇があったことを想定している〔前田ほか一九八三・二二〇頁〕。

八鳥ヶ原湿原では、四九〇〇年前以降二八〇〇年前までの間にミズナラは二回ほどの増減を繰り返すので、寒冷と温暖の小さな繰り返しのよって最寒冷期に向かっていることが花粉変遷グラフ(図7)から読み取れる⁽¹⁾。北江古田遺跡では、中期の小海退によって形成された谷の上には堀之内式土器が足の踏み場もないほど堆積していた〔辻ほか一九八七・四一頁〕。縄文後期に小海進があったとすれば、その開始は、中期海退による谷が形成され、それが埋積されるようになる堀之内式期であろう。関東地方でこの時期に集落や竪穴住居の数が増加する現象は、こうした気候の一次的回復を反映したものではないだろうか。

南関東地方で遺跡数をもっとも落ち込む縄文前期末葉から中期初頭が、急速な寒冷化の始まりである。寒冷化は中期を通じて進行したようだが、中期中葉は文化的な上昇期であり、遺跡数が急増した。安田喜憲はこの状況を、前期以来の内彎性集落が気候変動によって衰退したかわりに内陸部でも植物食に依存する集落が発展したためと説明する〔安田一九九〇・一八五頁〕。この解釈が正しければ、気候の寒冷化と文化の衰退が結びつくとは限らない一つの例となりうる。しかし、遺跡の消長と気候変動には相関関係も大いに認められる。中期末から後期初頭がそれ以来の最寒冷期であり、ついに耐え切れず中部高地では壊滅的な崩壊を引き起こして遺跡が激減する〔安田一九九〇・一八五頁〕が、小海進がある後期前葉には南関東地方では遺跡が増加して大規模化し、再び強い寒冷化現象がおとずれる晩期は集落・竪穴住居の激減期である、というように。

5 再葬の背景

(1) 祖先祭祀としての再葬

再葬がとくに制度として発達したのは、縄文中期末葉〜後期前葉の東北地方北部および房総地方と、縄文晩期〜弥生時代前半の中部日本であった。これらの時期に共通するのは、海面変動や花粉分析などから分かるように、いずれも相対的な寒冷期に相当していることである。気候の寒冷化と再葬の発達には、地域や時期を超えた因果関係が想定される。

権現原遺跡の多人数集骨葬を分析した渡辺新は、一八体の人々は歯の型式から二つのグループに分かれることをつきとめた。そして、多人数集骨墓を一つの集落の中で墓所を異にしていた出自の異なる二つの集団の子孫が、生活に弊害をもたらす排他的な関係を撤廃するための決意表明としてつくりあげた記念碑的存在とみなし、それが集落の中心に位置することから、環状集落を形づくったのはいわば集落の始祖である、と結んでいる〔渡辺一九九一・七二頁〕。さらに、権現原例をきっかけに多人数集骨葬が広まっていくと考えた〔渡辺一九九四・一六頁〕。山田

康弘は、加曾利EⅢ式期に大型集落は終焉を迎え、加曾利EⅣ式から称名寺式期に小規模集落が形成されるという関東地方の集落の消長をもとに、堀之内1式期に多発する多人数集骨葬は、小規模集落が集まって大型の集落を開設したときに祖先の骨を持ち寄ってつくったモニュメントであり、祖先崇拜のあらわれとみた〔山田一九九五・六四〜六五頁〕。

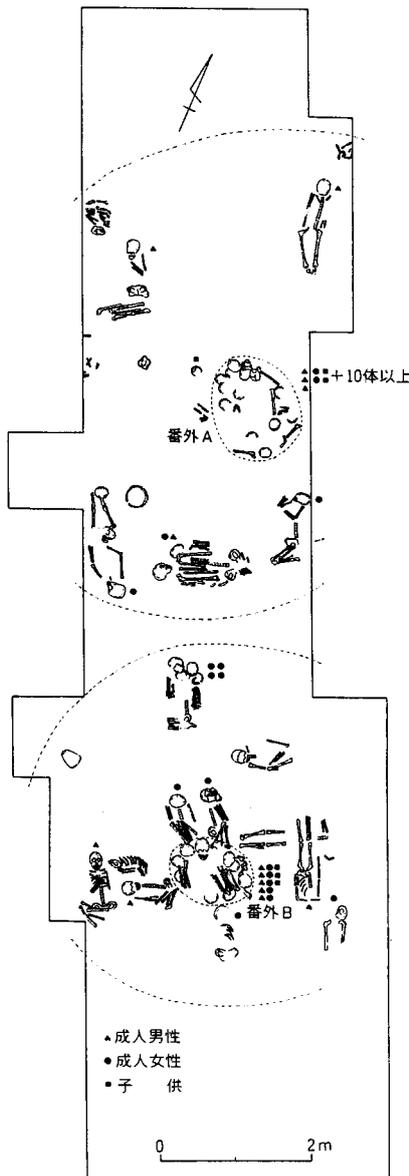


図8 福島県三貫地遺跡の埋葬（晩期）

縄文後期末の福島県新地町三貫地遺跡の多人数集骨葬も、それを中心として回りに埋葬が展開していたが（図8）、林謙作はそれら先葬者とその後埋葬をおこなった人々とのつながりが、「集団の始祖、祖霊」といった形でとらえられていた可能性」を指摘しており〔林一九七七・二三一頁〕、渡辺・山田の考えの原形とみなすことができる。渡辺の分析した権現原例は、社会的な変動期における再葬墓出現のメカニズムを説明する仮説を提示できた稀有な例である。それを含めた多人数集骨葬の集落や墓地の中での位置や構造から、それが集落の子孫たちにとって埋葬の中心となる象徴的な機能を果たしていたことは疑うことができないので、そこに祖先祭祀のための記念碑的施設、という性格を認めることができよう。

東北地方北部で再葬が出現、発達する縄文中期末〜後期前葉は、大規模集落が解体し、小規模分散化することが指摘されている。縄文前・中期に肥大化した集落は、寒冷化や人口の増大による領域の資源枯渇を集団の分散化とそれに伴う相対的な生活領域の拡大という方法によって回避しようとしたのであろう。しかし、墓地にはなお大規模なものがあり、複数の居住集団が一つの墓地を造営していることなどか

ら、分散居住するようになった人びとを結び付けていた原点は墓地だったといえる〔小林一九九五：七〇頁・設楽一九九五：九〇～九二頁〕。京葉地方東京湾東岸の同じ時期に、集落の減少化傾向があることは今回の遺跡集計データによってあらためて裏付けることができた。また、山田の分析からも明らかのように、この時期には集落の小規模、分散化傾向が東北地方北部と同様に指摘できる。埼玉県坂東山の再葬例は、東北地方北部と関東地方という広域かつ遠隔地でほぼ同時に生じた二つの現象の間につながりのあったことを知る手がかりになるものであり、この時期の再葬の発達が広域的に因果関係をもった現象であることを示している。

縄文中期には海面低下が広域に認められるが、それは中期末から後期初頭を頂点とするものであった可能性が高い。広い範囲で襲った気候の寒冷化現象が、人口の減少を導くとともに集落の小規模分散化をもたらした、それまでの人びとの結集を象徴的に再現したりする装置である祖先祭祀の中心的存在として再葬墓が地域を超えて発達した。この装置の出現の背景は気候寒冷化にあるが、ひとたび制度として定着すれば集落の人びとの結合を強化し円滑化する機能を強めるので、上昇期における堀之内1式期に発達して加曾利B式期まで継続することも理解できる。山田の言うような集落開設時だけではなく、下太田例のように集落継続期の中でも何らかの理由において墓制転換が生じている可能性がある。

縄文晩期は再び気候の寒冷化が進行した時期であった。晩期から弥生時代前半にかけて再葬が発達するが、やはり気候変動との関連性に注意が向けられる。弥生時代の中部日本では、再葬墓が数多く検出されるのに対して、それに見合う集落は極めて限られることが指摘されている。石川日出志はこの点に関して、分散化している小集団が集まってつくった再葬墓はいわば共同墓地であり、再葬は同族意識を確認する儀式だと理解している〔石川一九九九：一七五頁〕。今後集落の発見が再葬墓な

みになされとも思えないので、この考えは妥当だろう。群馬県安中市では段丘上にこの時期の再葬墓に対応するであろう小集落が点々と見つかっているが、これなどは数少ない例の一つである。憶測に過ぎないがこれらは畠作などの農耕をおこなっていた移動性の強い小集落であったと思われる。

いずれにしても、分散化した集落とそれに見合わない墓地の大きさと再葬の発達は東北地方北部の後期前葉のあり方と共通する。縄文晩期の中部日本は集落や堅穴住居の数が激減する時期で、人口が急減したことは想像にかたくない。それとともに再葬が焼人骨葬や部分骨再葬あるいは穿孔人歯骨の佩用など数々の儀礼を発達させて頂点を迎えており、気候変動と再葬の展開に時代をこえた因果関係のあることが確認できる。

この時期の海面変動は世界的なものであるから、気候の寒冷化も広範囲で生じたものだろう。それにもかかわらず東北地方では集落の数は中部日本ほどに落ち込んでおらず、再葬もみられない。気候変動が必ずしもすべての地域の文化に等しい変化を与えたものでないことの証であり、そこに自然環境に対応した地域ごとの個性をうかがうこともできるのである。

(2) 合葬の意味

東北地方北部における縄文後期の再葬では、土器に成人の遺骨を納めるにあたり、全身の骨を集めている。さらに生前の姿に近づけた蹲踞姿勢で再葬している点からは、再生あるいは母体回帰といった意図がうかがえる。房総地方の再葬がこうした再生観を伴うか否か不明だが、両地方の再葬は合葬を目的とした点に共通性があり、とくに房総地方のそれは出自集団としての血縁関係を重視した世帯構成員の合葬という点に再葬の目的があるように思われる。東北地方北部の合葬された人々の関係については不明な点が多いが、権現原例などは被葬者の関係のみならず、合葬の具体的な契機を知りうる可能性をもった例であろう。そこでもう

少し、多人数集骨葬の起源と合葬の内容について検討しておくことにしたい。

多人数合葬出現以前、すなわち縄文中期の京葉地方では、廃屋の床などに遺体を葬る廃屋墓¹⁴⁾が展開しており、後期中葉まで続いた。廃屋に葬る遺体の数は一、二体が多いが、四体以上最高九体に及ぶ。四体以上のものは成人男女と子どもを組み合わせが多いことを考えると、その住居にかつて居住していた夫婦と子どもを核とした世帯構成員の可能性が高く〔春成一九八一・一九一〇～一九二頁〕、山田はそれを形質学的に明らかにしている〔山田一九九五・六二～六四頁〕。

権現原例のような多人数集骨成立期における人員構成や上屋構造の存在などからすれば、多人数集骨は廃屋墓の被葬者である世帯構成員を一セットあるいは数セット再葬したものか、または廃屋墓を象徴的に表現した〔春成一九八〇・三三三頁〕形で成立した可能性が高い。渡辺は市原市草刈遺跡の廃屋墓の一つに、四本の柱の間に頭位方向をそれぞれ変えて四角形になるように葬ったものと、権現原の盤状集骨状の形態的類似を指摘している〔渡辺一九九四・一六頁〕。千葉県市川市向台遺跡の22号住居跡の廃屋墓では、壁際の柱穴の間に八体が葬られており(図9)、土坑の中央を空間として壁際に頭を寄せたり向けたりする葬法に多人数集骨葬との類似点を見出せる。高橋龍三郎は、草刈遺跡における中期後半以降の環状集落の住居が内側に向かってむしろ居住スペースを狭めるように形成されていくのは、外側に設けられた中期中葉の廃屋墓を祖先として意識した結果、重複を慎んで外側に拡張しなかったからではないかと推測しており〔高橋一九九一・六一～六二頁〕、祖先祭祀の面からもその連続性がうかがえよう。

縄文後期になると、千葉県松戸市貝の花遺跡や市原市西広遺跡では廃屋墓からオープン・スペースに遺体が埋葬されるようになるが、なおも同時期の竪穴住居周辺に埋葬されている。すでに東北地方などがある程

度竪穴から自立して埋葬を集中させた墓域を形成しているにもかかわらず、京葉地方では依然として竪穴住居へのこだわりを強く見せている。また、貝の花遺跡などには抜歯と無抜歯の合葬がみられ、夫婦合葬もおこなわれていたようである。それは世帯の自立化傾向、つまり婚入者を含みこんだ竪穴住居構成員の結束が京葉地方で根強かったことを示すものであり、世帯原理が優先していたのであろう。そこに祖先祭祀の意義をもつ多人数集骨が、世帯構成員を軸として成立する要因があった。

このように多人数合葬は基本的には世帯構成員からなっているが、中妻や古作例などの性の偏りからするとその後半には世帯構成員の一部が排除されていた可能性がある。排除された者が婚入者を中心としていたとすれば、多人数合葬は世帯構成員全体から血縁関係を中心に構成されるように推移した可能性が考えられ、後期中葉以降、出自と世帯の相反する原理〔春成一九八三・五一頁〕をかかえた千葉県千葉市姥山遺跡M地点などの墓地へとつながる。その場合の排除された者に関しては、中妻と古作の多人数集骨がともに男性が圧倒的であることと、中妻の分析

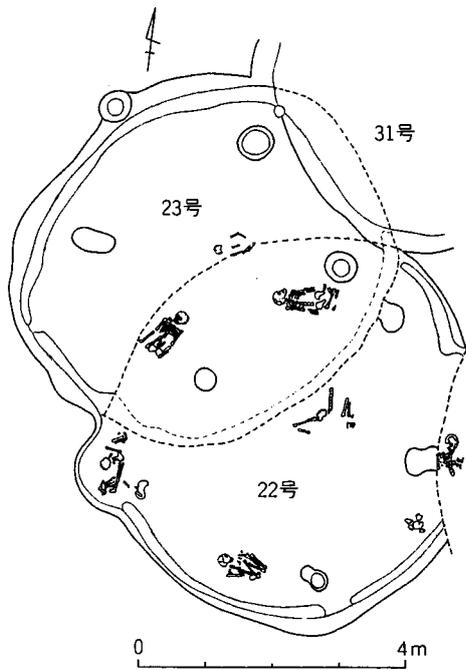


図9 千葉県向台遺跡の廃屋墓 (中期)

資料に血縁関係が強く認められることからすると、夫方居住婚を適用して中妻に婚入した女性の多くは古作例のように多人数集骨葬の周りに埋葬されているか、出身集落に帰葬されたと考えるところの現象を理解しやすい。しかし、ミトコンドリアDNAが母系に遺伝することからすると、分析例は母系の血縁関係を強く示唆しており、それに対して男性が多いという矛盾をはらんで問題を複雑にしている。¹⁶⁾

世帯別原理が優先していた縄文中期の墓制から、世帯を統合した性格をもつ多人数集骨葬が後期初頭に出現し、後期中葉に墓域が成立してくるといふ流れは、中期後半まで屋内祭祀を主体とした石棒祭祀が、中期末・後期初頭を境に徐々に屋外石棒祭祀へと移行していくという流れ〔山本一九八三：一七七頁〕と一致する。山本暉久は、この個別竪穴成員祭祀↓集落共同体成員祭祀への移行が、中期末・後期初頭を画期とした個別化の方向性の崩壊⇨集落共同体成員間の紐帯の再編・強化を意味すると考えたが、それを促した要因の一つとしてすでに述べたように気候変動が想定できる。

縄文晩期から弥生時代には、蔵骨器に再葬する遺骨保存の意図が一貫してみられる一方、焼人骨葬という遺骨破壊の習俗が新たに加わり定着した。遺骨破壊の背景として、焼獣骨の共存などから再生の意図を推測することも可能だが、死という通過儀礼最大の集団的危機をもたらしどっちつかずの境界的狀況下〔V・W・ターナー一九七六：一九一頁〕において蘇りやたたりを恐れるという相反する意図も想定できるので、この決着は容易ではない。しかし、遺骨から歯や指を取り出して穿孔、佩用し、再葬の儀式期間の終了とともに廃棄するといった行為をはじめとして、再葬の儀礼が一段と複雑化し、さまざまな手続きを踏んでおこなわれるようになったことは確実である。埋設土器はすべて蔵骨器と認められないものの、複数の土器を一つの土坑に埋納していることからすれば、ある種の合葬がおこなわれていた可能性は高いものとみるべきだ

ろう。遺骨のほとんどは焼かれて土器に納められた骨はほんの一部分であるので合葬の内容はまったくといってよいほど不明だが、世帯ごとに設けた埋葬小群が集まって弧状をなすという墓域構成からすると、出自規制が働いた世帯構成員の合葬という縄文晩期以来のありかたが、集合した蔵骨器に合葬されている人々の関係に反映しているのではないだろうか。

(3) 通過儀礼としての再葬

それにしても、なぜ再葬しなくてはならないのか、という疑問がつきまとう。確かに権現原例に対する渡辺の解釈は再葬の理由を説明しうるすぐれた仮説であるが、ひとたび制度として定着すれば、再葬せずとも共同のモニュメントを設けてそこに次々と葬ればよいではないか。事実、後期前葉には多人数合葬が出現して、一つの墓坑に単葬遺体を追葬していく様式に変化しているのである。

人類学では、死や葬儀は死者が先祖になる前に必ず通過しなければならぬものだが、それ自身、祖先としての身分を付与するものではなく、先祖になるためには特別な儀礼が必要だとされる〔M・フォーテス一九八〇：一四一～一四二頁〕。

琉球・奄美諸島などの南島で、洗骨葬という一種の再葬が発達したことはよく知られている。加計呂麻島では埋めてから七年目に洗骨をおこなった。徳之島では三年ないし七年後に掘り出して洗骨した。沖永良部島では埋葬後三年（肥満は五、六年）、与論島は普通三、四年であった。洗骨の目的は浄めであるとされる。霊は生まれ変わるか昇天するが、骨はかわらずに残るものであるから、その骨に汚染が残っているのは霊も神の仲間入りができないというのである〔名嘉真ほか一九七九〕。とくに頭骨が重視され、墓の中に真綿にくるまれて置かれたり、厨子壘という蔵骨器の一番上に置かれたりした。

奄美本島では、死者の供養は一・三・五・七・一三・二五・三三回忌

で終わる。与論島では改葬後に骨を海辺の砂地の墓地に埋めておくが、三三回忌がすむとこの白骨をギシという洞穴に納めた。奄美諸島では墓を媒介としたさまざまな祭りがおこなわれ、墓が祖先崇拜の拠点であり、祖先崇拜がもっとも深い信仰になっているとされる〔赤田一九八〇〕。

死者の供養、祖先の仲間入りをさせるために、実にさまざまで長い手続きが踏まれている。その際の遺骨処理方法の基本は一連の再葬制であり、その本質は祖先の仲間入りをするための祖先祭祀であることが注目されるよう。洗骨葬は、死↓骨化↓祖先への仲間入りという、通過儀礼に一般的にみられるとされる分離期、過渡期、統合期という推移〔A・V・ヘネップ一九七七・九頁〕をたどる。洗骨葬には、祖先になるための通過儀礼という特別な儀礼としての役割、意味があったと考えられる。

洗骨の際、骨に肉がついていることを忌む南島の洗骨葬には穢れをはらう觀念が色濃くかがわれ、洗骨までに長い期間をあてるのが通例である。これに対して軟部がついていたり椎骨が連結していたりする縄文・弥生時代の再葬に穢れの意識は見受けられず、骨あげの期間も相当短い場合があった。また、頭骨を特別視するようなこともない。したがって、南島の洗骨葬との間には觀念的な相違も大きく単純に比較できないが、これまで述べてきた多人数集骨葬の祖先祭祀の可能性と、縄文晩期〜弥生時代の再葬に複雑な儀礼の手続きがあったことからすると、通過儀礼と祖先祭祀が死者儀礼の原点になっているという共通性を見出すことも可能ではないだろうか。

縄文晩期には、さらに抜歯や土製耳飾りをはじめとする各種の通過儀礼が発達した。ターナーは、複雑な加入儀式などは形式ばった組織を形成するとし、儀礼をおこなう頻度は社会的な葛藤の増大に対応して増える場合があることを指摘している〔V・W・ターナー一九七六・一五・二七九〜二八〇頁〕。悪化する自然環境のもとで、とくに縄文時代の晩期社会が地域的に通過儀礼をはじめとするさまざまな儀礼を発達させた

が、それを理解するうえで有効な指摘といえよう。

6 まとめ

縄文・弥生時代で再葬が制度として成立し、定着するのは、縄文中期末〜後期前葉の東北地方北部と房総地方、縄文晩期〜弥生時代前半の中部日本である。それらはいずれも列島規模で文化や社会が大きく転換した時期であり、時代であった。そこに共通するのは、集落が小規模化し分散化するということである。その背景には、日本列島の広い範囲を襲った気候の寒冷化現象があり、それが人口の減少を導くとともに集落の小規模分散化をもたらした。

集落の小規模化、分散化の一方で、なおも墓地は大規模な場合がある。そして、シンボリックな記念碑的存在として、土器に再葬した墓や多人数集骨墓などが複数の地域で成立した。これは、祖先あるいは始祖の世帯を中心とした集団を、その後継者たちが合葬した墓である。悪い環境に陥った時に、小規模化し分散化した集落あるいは集団の結束を固めるための手段として、それまでの人びとの結集を象徴的に再現した再葬墓が、時代や地域を超えて祖先祭祀の中心的存在として成立したのである。ひとたび定着した再葬は、集落の規模などが回復してからもなお社会を統合する装置として継続発展する場合があった。このことは、京葉地方の再葬墓が示している。

本稿では集落の衰退期に制度として成立した再葬の背景を、寒冷化現象という自然環境的要因から説明した。しかしこれはたんなる環境決定論ではない。むしろ集落を小規模化、分散化させた集団編成や祖先祭祀を強化することによって結合を維持するという、自然環境の変動に立ち向かうための社会的・文化的な装置としての働きという技術的側面が強く作用している点を評価しなくてはならない。また、数ある再葬の背景

が自然環境の変動だけに帰されるものでないことはいうまでもない。

琉球・奄美諸島でおこなわれていた洗骨葬の本質は、祖先祭祀を機軸とした通過儀礼である。時代や地域を超えた文化を一概に比較はできないが、この類似性は縄文後期から弥生時代にかけて発達した再葬を理解するうえで参考になる。本稿で分析した縄文・弥生時代の再葬は、基本的に世帯構成員あるいは血縁関係を重視した親族組織を中心になされたものであり、子孫が近い祖先に対しておこなった、祖先祭祀の性格をもつ死者儀礼であった。祖先祭祀とそれに伴う通過儀礼は、いわば危機を乗り切るための縄文時代の人びとが発達させた一つの技術であるといえよう。中部日本における縄文晩期の再葬は、死者を祖先の仲間入りさせるための複雑な通過儀礼をますます発達させた。弥生時代の同地方にこれが継承されているのは、その地域文化の性格を物語っている。

〔謝辞〕

本稿を執筆するにあたって、青沼道文・石坂雅樹・上野和男・岡田康博・小林謙一・小林克・篠原徹・白石太郎・新谷尚紀・高橋康男・辻誠一郎・常光徹・西野雅人・西本豊弘・春成秀爾・峰村篤・山田康弘・四柳隆・領塚正浩・渡辺修一の諸氏のお世話になった。記して感謝したい。

註

- (1) ドイツの人類学者、ヴァルデマール・シュテアの分類。大林太良は単葬と複葬とに区分している。
- (2) これまで、土器の中に再葬人骨を納めて葬る葬法を土器棺再葬と呼び、大型壺を多用するようになった弥生時代のそれを壺棺再葬とする呼称に従ってきた。しかし、白石太郎の教示によると棺は遺体を納める施設であり、遺骨を納めたものには普通使われない。遺骨を納める器は蔵骨器、あるいは骨蔵器というのが一般的である。したがって、土器棺再葬あるいは壺棺再葬という名称は不適當である。筆者もこれらの用語を用いていたが、適当なものに改める必要があると考えている。
- (3) 多人数集骨葬と少人数のそれとの境は、四体合葬はあまりなく、五体合葬以

上のものと同じ類型のものが認められるので、一応五体以上を多人数集骨葬としている。ただし、三体あるいは四体の集骨にも多人数集骨葬と同じような合葬の契機と意味をもつものがあるかもしれない。

- (4) 萩原らは、堀之内2式期と加曾利B1式期の多人数集骨葬と単葬を、集団間の区別や社会的要請にもとづいて同時期におこなわれた遺骸の取り扱いの差とみなしており、筆者の想定とは異なる。
- (5) 火葬は一般的に遺体を焼くことであるが、縄文・弥生時代の焼けた骨は軟部がついている場合があるもの、おおもむね骨化してから焼かれたものが大半であり、火葬と区別する必要があるのではこのように呼んでいる。
- (6) 註2参照。縄文時代の再葬と区別するための本論文での仮称に過ぎない。
- (7) 表2・図5の集計に用いたデータは、手元にある発掘調査報告書からの引用に加えて、各地の研究者の教示を得て作成した。集計に用いた東京地方東京湾東岸の時期のわかる堅穴式住居跡が報告された遺跡の数は三七八遺跡、堅穴住居跡総数は三五八七棟である。すでに発掘調査を終えているが、整理が進んでいない遺跡のデータははずした。また、細別した土器型式レベルでの時期がわからないもの、たとえば加曾利E式としかわからない住居跡数は、EⅠ～EⅣ式までに細別できた棟数の比率に応じて比例配分してそれに加えた。その他にもこうした操作を経ているので、堅穴住居跡数を、小数点を用いて記載したものがあ

がある。

- (8) この地域の遺跡数を遺跡分布地図(千葉県一九九七・一九九九)から集計し(表1)、遺跡数の変動も棒グラフで示した(図5)が、加曾利B式の遺跡数と堅穴住居跡数の比率には著しい差があることからわかるように、遺跡の数から単純に集落人口を類推することは危険であることを示している。ただし、堀之内2式以降、大型堅穴建物が登場するので、単純に堅穴の数から人口を類推することにも問題を残している。大型堅穴の推定居住人数あるいは堅穴の役割自体も明らかにしなくてはならないなど、さまざまな問題を含んでいるが、今後の課題とした。
- (9) 小林謙一教示。
- (10) 以下の年代は炭素14年代に統一して記述しているので、較正年代とは異なる。
- (11) このグラフを細かく見ると、さらにいくつかの増減が認められる。それぞれ小さなピークの年代が、縄文中期前葉から晩期前葉のどの土器型式に相当するのかが明らかでないが、ミズナラの増減(図7)と集落数や堅穴住居の増減(図5・6)とが対応している可能性も考えてみる必要があるだろう。
- (12) 考古学的な証拠から祖先を崇拜しているといえるもの以外は、祖先崇拜という言葉はさけるべきだろう。

(13) 再葬人骨の中には椎骨が連結しているものがみられることや、中妻例の再葬

人骨に傷がついたものがありなく、一次葬の場所を覚えていて慎重に遺骨を掘り起こしたためという山田の所見などからすると、この場合の祖先は遠い祖先ではなく近い先祖を想定したほうがよい。多人数集骨を「祖先」として意識していたか否かは、小杉が長野県北村遺跡の配石墓などの事例からおこったような実証的分析(小杉一九九五)が必要とされ、それを経ずに「祖先」の問題を軽々に論じるべきではないが、権現原や中妻の考古学的、人類学的なデータからすると、集骨をおこなったのはそれらの子孫であり、その集骨には血縁関係が認められるので、再葬されたのはやはり再葬実行者にとつての祖先とみるのが妥当だろう。祖先祭祀とは、生きている集団の成員が死んだ成員に対して交流を図る一連の儀礼(新谷一九九八:三二六頁)と理解しておく。

(14) 廃屋墓の概念規定をめぐってはさまざまな議論があるが、ここでは死者が出ると遺体を置き去りにして家を放棄し、その家の床面や埋まっていた土の上に新たに出土した死者を追葬していくものを典型例としておく。

(15) 林謙作は、墓域とはそのなかがあらかじめ何らかの原理によって分割されたものであるとされ、その意味では姥山遺跡M地点の埋葬は墓域成立直前だとしている(林一九八〇:二七六頁)。

(16) ただし、篠田がいうように、この同一のハプロタイプが集落周辺の集団でも多数を占めるハプロタイプであった場合には、同一のハプロタイプであるということが特定集団の血縁の濃さを示す指標にならないのであり、婚入者であった可能性もあるから、中妻遺跡の多人数集骨が母系出自集団であるという理解には慎重になる必要がある。一方、これを母系出自集団とすなおに理解して、中妻から婚出した男性を出身集落に帰葬したとすること(高橋一九九八:五八頁)も、解釈としては可能である。

引用・参考文献

赤田光男 一九八〇『葬儀習俗の研究』日本民俗学研究会叢書 弘文堂。
 アルノルト・V・ヘネップ 一九七七『通過儀礼』綾部恒雄訳 弘文堂。
 石川日出志 一九八八『縄文・弥生時代の焼人骨』『駿台史学』74号 八四〜一一〇頁 駿台史学会。
 石川日出志 一九九九『東日本弥生墓制の特質』『新弥生紀行』一七五〜一七六頁 朝日新聞社。
 井関弘太郎 一九五〇『初期米作集落の立地環境—愛知県瓜郷遺跡の場合』『資源科学研究所集報』16号。
 井関弘太郎 一九八五『弥生時代以降の環境』『岩波講座 日本考古学』2 人間と

環境 一六五〜二二二頁 岩波書店。

今村啓爾 一九七七『称名寺式土器の研究(下)』『考古学雑誌』第63巻第2号 一〇〜一四八頁 日本考古学会。

今村啓爾 一九九七『縄文時代の住居址数と人口の変動』『住の考古学』四五〜六〇頁 同成社。

ヴィクター・W・ターナー 一九七六『儀礼の過程』富倉光雄訳 思索社。

遠藤邦彦・小杉正人 一九八九『地形環境』『弥生文化の研究』第1巻 弥生人とその環境 一三一〜一四七頁 雄山閣出版。

太田陽子・松島義章・森脇広 一九八二『日本における完新世海面変化に関する研究の現状と問題』『第四紀研究』第21巻第3号 一三三〜一四三頁 日本第四紀学会。

大竹憲治編 一九八六『霊山根古屋遺跡の研究』霊山根古屋遺跡調査団。

大林太良 一九六五『葬制の起源』角川書店。

小野田正樹 一九八二『海進・海退(Ⅱ)』『縄文文化の研究』第1巻 縄文人とその環境 一四三〜一六二頁 雄山閣出版。

岡田康博 一九九八『東日本の縄文文化』『季刊考古学』第64号 三一〜三五頁 雄山閣出版。

葛西 励 一九八三『縄文時代中期、後期、晩期(葬制の変遷)』『青森県の考古学』二二〜三〇頁 青森大学出版局。

葛西 励 一九九八『再葬土器棺墓の研究 縄文時代の洗骨葬』『再葬土器棺墓の研究』刊行会。

金井典美・岩田英経 一九六八『長野県霧ヶ峰高原の旧石器文化の環境とC14年代』『考古学ジャーナル』23一六〜二〇頁 ニュー・サイエンス社。

小杉 康 一九九五『縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立—「葬墓祭制」の構造と機能—』『駿台史学』第93号 一〇〜一四九頁 駿台史学会。

小林 克 一九九五『葬制からみた亀ヶ岡文化』『縄文発信 シンポジウム亀ヶ岡文化の北と南』(岩手県立博物館調査研究報告書)第11冊 六六〜七一頁 岩手県立博物館。

阪口 豊 一九六一『北日本の完新世の気候変化』『地理学評論』第34巻第5号 二五九〜二六八頁 日本地理学会。

酒詰伸男 一九六一『編年上より見たる食品について』『日本縄文石器時代食料総説』三一八〜三二二頁 土曜会。

設案博己 一九九一『最古の壺棺再葬墓—根古屋遺跡の再検討—』『国立歴史民俗博物館研究報告』第36集 一九五〜二三八頁 国立歴史民俗博物館。

設案博己 一九九三a『縄文時代の再葬』『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集

- 七〇四六頁 国立歴史民俗博物館。
設楽博己 一九九三b「壺棺再葬墓の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』
第50集 三〇四八頁 国立歴史民俗博物館。
設楽博己 一九九四「壺棺再葬墓の起源と展開」『考古学雑誌』第79巻第4号 三八
三〇四二二頁 日本考古学会。
設楽博己 一九九五「縄文葬制における亀ヶ岡文化」『縄文発信 シンポジウム亀ヶ
岡文化の北と南』(岩手県立博物館調査研究報告書 第11冊) 八九〇九三頁 岩
手県立博物館。
設楽博己 二〇〇一「多人数集骨葬の検討」『シンポジウム縄文人と貝塚』五〇〇六
四頁 学生社。
篠田謙一・松村博文・西本豊弘 一九九八「DNA分析と形態データによる中妻貝
塚出土人骨の血縁関係の分析」『動物考古学』第11号 一〇二二頁 動物考古学研
究会。
新谷尚紀 一九九八「先祖祭祀」『日本民俗宗教辞典』三二六〇三二九頁 東京堂出
版。
高橋龍三郎 一九九一「縄文時代の葬制」『原始・古代日本の墓制』四八〇八四頁
同成社。
高橋龍三郎 一九九九「東日本―関東地方における縄文後期前半の墓制」『季刊考
古学』第69号 五五〇五九頁 雄山閣出版。
千葉県教育委員会 一九九七「千葉県埋蔵文化財分布地図(1)―東葛飾・印旛地
区(改訂版)―」。
千葉県教育委員会 一九九九「千葉県埋蔵文化財分布地図(3)―千葉市・市原市・
長生地区(改訂版)―」。
辻誠一郎・宮地直道・遠藤邦彦 一九八七「北江古田遺跡の地質・層序」『北江古田
遺跡発掘調査報告書(2)』三九八〇四一八頁 中野区・北江古田遺跡調査会。
辻誠一郎 一九八九「植物と気候」『弥生文化の研究』第1巻 弥生人とその環境
一六〇〇一七三頁 雄山閣出版。
外山和夫・宮崎重雄ほか 一九八九「板倉遺跡」『板倉町史考古資料編』別巻9 二
三七〇四二四頁 板倉町史編纂委員会。
中野尊正 一九五二「日本の海岸低地形に関する若干の問題」『駿台史学』第2号
五九〇七二頁 明治大学史学地理学会。
名嘉真宜勝・恵原義盛 一九七九「沖繩・奄美の葬送・墓制」明玄書房。
永峯光一 一九八四「森と浜の墓(縄文時代)」『季刊考古学』第9号 一八〇二二
頁 雄山閣出版。
並木隆・小片保 一九七三「坂東山」(埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第2集) 埼
玉県教育委員会。
萩原恭一・菅谷通保 一九九九「千葉県茂原市下太田貝塚」『日本考古学年報』50
五三八〇五四一頁 吉川弘文館。
花輪 宏 一九九九「板東山壺棺墓の系譜」『考古学雑誌』第84巻第2号 一〇五
一四八頁 日本考古学会。
馬場保之 一九九四「配石墓9」『中村中平遺跡』四七〇五二頁 飯田市教育委員会。
林 謙作 一九七七「縄文期の葬制―第II部・遺体の配列、とくに頭位方向―」『考
古学雑誌』第63巻第3号 二二一〇二四六頁 日本考古学会。
林 謙作 一九八〇「東日本縄文期墓制の変遷(予察)」『人類学雑誌』第88巻第3
号 二六九〇二八四頁 日本人類学会。
林 謙作 一九九一「大湯環状列石の配石墓(1)」『よねしろ考古』第7号 一〇
五〇二二五頁 よねしろ考古学研究会。
春成秀爾 一九八〇「縄文合葬論―縄文後・晩期の出自規定―」『信濃』第32巻第4
号 三〇三〇三三七頁 信濃史学会。
春成秀爾 一九八一「縄文時代の複婚制について」『考古学雑誌』第67巻第2号 一
五七〇一九六頁 日本考古学会。
春成秀爾 一九八三「縄文葬制の諸段階」『歴史公論』第9巻第9号 四〇〇五二頁
雄山閣出版。
古川博恭 一九七二「濃尾平野の沖積層―濃尾平野の研究その1―」『地質学論集』
7 三九〇五九頁。
星田享二 一九七六「東日本弥生時代初頭の土器と墓制―再葬墓の研究―」『史館』
第7号 一〇〇五二頁 市川ジャーナル。
マイヤー・フォーテス 一九八〇「祖先崇拜の論理」田中真砂子訳 ベリカン社。
前田保夫・山下勝年・松島義章・渡辺誠 一九八三「愛知県先刈貝塚と縄文海進」『第
四紀研究』第22巻第3号 二二三〇二二二頁 日本第四紀学会。
松村博文・西本豊弘 一九九六「中妻貝塚出土多数合葬人骨の歯冠計測調査報告に
もとづく血縁関係」『動物考古学』第6号 一〇一七頁 動物考古学研究会。
森本岩太郎 一九八八「本州北端における縄文時代後期改葬壺棺内人骨について」『日
本民族・文化の生成』永井昌文教授退官記念論文集 五五〇七六頁 六興出版。
安田喜憲 一九九〇「気候と文明の盛衰」朝倉書店。
山田康弘 一九九五「多数合葬例の意義―縄文時代の関東地方を中心に―」『考古学
研究』第42巻第2号 五二〇六七頁 考古学研究会。
山本暉久 一九八三「石棒」『縄文文化の研究』第9巻 縄文人の精神文化 一七〇
〇一八〇頁 雄山閣出版。
米田耕之助 一九八〇「縄文時代後期における一葬法」『古代』第67号 三一〇三八

頁 早稲田大学考古学会。

渡辺 新 一九九一「千葉県権現原貝塚の研究Ⅰ」縄文時代集落の人口構造。

渡辺 新 一九九四「多数人骨集積の類例追加と雑感」ひつじ書房。

渡辺 新 一九九五「下総台地における石棒の在り方(暫見)——市川市高谷津遺跡の出土事例から——」『利根川』16 五四～五九頁 利根川同人。

渡辺 新 二〇〇一「権現原貝塚の人骨集積から集落の人口構造を考える」『シンポ ジウム縄文人と貝塚』六五～八〇頁 学生社。

挿図出典

図1-1 遠藤正夫ほか一九八一「鷹架遺跡」(青森県埋蔵文化財調査報告書)第63集) 三六頁 青森県教育委員会。 2 並木ほか一九七三・一一八・一一九頁。

図2-1・2 渡辺一九九一・七・八・四六頁。 3 米田一九八〇。 4 設案二〇〇一・五七頁。

図3-1 馬場一九九四・三九・四〇・四九頁。 2 荒巻実ほか一九八六「C11沖Ⅱ遺跡」藤岡市教育委員会・八五頁・設案一九九三b・三七頁。

図4 今村一九九七・四九頁。

図5・6 設案作成。

図7 金井ほか一九六八・一八頁。

図8 森幸彦ほか一九八五「三貫地貝塚」(福島県立博物館調査報告)第17集) 七三・七四頁 福島県立博物館。

図9 杉原莊介・戸沢充則一九七一「向台遺跡」『市川市史』第1巻 二二六頁 吉川弘文館。

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

(二〇〇三年五月三〇日受理、二〇〇三年六月二六日審査終了)

A Background to Reburial: Correspondence to Environmental Changes in the Jomon and Yayoi Periods

SHITARA Hiromi

The periods between the end of Middle Jomon and Late Jomon and between Final Jomon and the beginning of the Yayoi period were periods of great cultural and social change in the Japanese archipelago. But what is the significance of the custom of reburial that was practiced at these junctures in our history that exceeds place and time? One change that is common to areas in which reburial developed is the decline of villages, that is, decreases in population. A study of environmental changes shows that cooling of the climate was a feature common to these periods of change. It would not be an exaggeration to say that a deterioration in the environment induced reburial.

There are no doubt various reasons for the emergence of reburial in the course of history. One reason is the occurrence of ancestor worship performed for the purpose of solidifying the bonds of a village or region with the dead as the linchpin. Reburial functioned as a starting point for the integration of villages that had been dispersed and had shrunk in size as a result of deterioration in the natural environment, and this was symbolized by the ancestors that were reburied and by the graves themselves. It cannot be said, however, that reburial always developed at times of an unfavorable environment, as illustrated by the Keiyo region where reburial developed during early Late Jomon when a re-warming of the climate formed a huge shell midden. Even if the natural environment did recover or villages started to grow, one may assume that the system of reburial that had become a fixed custom at an earlier time continued to function as a device for bringing the village together.

The washing of bones and burial practiced on the Amami islands of the Ryukyus signifies ancestor worship and is helpful when considering reburial in the Jomon and Yayoi periods. In this sense, reburial was carried out as a type of rite of passage. The period from Late Jomon through to the first half of the Yayoi period was a time in which rites such as the removal of teeth developed. The reburial system also took on stronger ritualistic elements during this time, or in other words, there was a strengthening of ancestor worship and rites of passage. The background to reburial lies in this ability to sustain life in the face of a harsh natural environment.
